

琉球大学学術リポジトリ

春作馬鈴薯の植付

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島袋, 正雄, Shimabukuro, Masao メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20849

春作馬鈴薯の植付

2月から3月にかけて琉球においては春作馬鈴薯の植付時期である。昨年は種いもの生産地である九州が豪雨に見舞われ大被害を受け種いもの生産が激減し且つ価格も高騰したため、その輸入がなく秋作は不能に終わった。しかしその後北海道から干害対策用などの種いもの(男爵)が届き冬作として現在栽培中であるがその肥培、病虫害対策に注意を払うとともに春作の増反、増収をめざして昨秋の植付不能の分も取りかえして、みいりの少い6月頃の農家収入の増加をはかりたいものである。

種いものは農連や園連が一括輸入して農家の便宜を図っているなのでその種いものを使用すれば一応安心です。種いものとしての国営検査を受けたものであり又沖縄の春作に最も適すると認められた品種であり生産力の高い月令のいものであるからです。

種いものはウンゼンで長崎県での秋作で生産されたも

のと思われます。2月中旬以後に農家の手に渡ることと思いますので春作の植付について若干のべこみたい。

馬鈴薯は涼しい気候を好む作物で大体12度から23度が栽培適温とされ、植付けてから前半は或程度温度が高く昼の時間も長い方が茎や葉の生育に都合がよく、いもの発育には気温が15~18度が最も理想とされておりますので沖縄では10月~11月植付けて1月から2月の収穫が気象的に最もよい時期で大体秋作がこれに該当します。春作では2月から3月にかけて植付けるため気象環境は秋作とは全く逆になり植付け後気温が高く日長は日毎に長くなり、時期がおくれる程収量が減るので種いも受領後は芽の出方をみて、なるべく早めに植付けられるよう予め圃場の準備をしておかねばなりません。参考のために1962年琉大農場で行なった植付時期と収量との関係の一例をあげてみます。(供試種いものは長崎県秋作のウンゼンで同一

植付時期と収量 対0.1a (3坪、54株) 1962年

調査項目 植付時期	植付 月 日	収 穫 月 日	在 圃 日 数	いも個数				いも収量 kg				収 量 指 数	収 量 比 %			植 付 当 時 の 月 令
				大	中	小	計	大	中	小	計		大	中	小	
3月上旬区	3.5	6.13	100	125	89	49	263	22.1	7.7	2.0	31.8	100	69.50	24.21	6.29	2.6
3月中旬区	3.15	6.23	100	99	75	40	214	18.2	6.6	1.9	26.7	84	68.16	24.72	7.12	3.0
3月下旬区	3.24	7.3	101	80	78	36	184	14.2	6.8	1.6	22.6	71	62.82	30.09	7.08	3.3
4月上旬区	4.5	7.14	100	49	45	45	139	9.3	3.9	1.99	15.19	48	61.22	25.67	13.11	3.6
4月中旬区	4.16	7.25	100	24	42	49	115	3.67	3.55	2.19	9.41	30	39.00	37.73	23.27	4.0
4月下旬区	4.25	7.26	92	9	48	30	87	1.52	4.02	1.3	6.84	22	22.22	58.77	19.01	4.3
5月上旬区	5.4	7.26	83	0	4	14	18	0	.26	.54	.80	3	0.00	32.50	67.50	4.6

註 大いも 120g 以上、中いも 60~120g 未満 小いも 30~60g 未満
上表によれば春作は植付が3月上旬からおくれるに従って、いもの個数、並びに収量が次第に減って、大いもの割合もおちていきます。

群の種いもを用いたので植付当時の月令は各々異なる)

春作の植付予定圃場は甘蔗や甘藷、蔬菜等のあと作になるが何れにしても種いも注文の量に応じた面積の圃場(1ケース当り約2a)を予め準備します。連作は勿論ですが茄子、たばこ、トマトなどの茄子科の作物の跡地はさけた方がよい。馬鈴薯は土質お余り選ばないが有機質に富む排水のよい壤土や砂質壤土に適し甚だしい砂地や重粘土又は有機質の少い土壤では多くの収量をあげることは期待できません。甘蔗の跡地は残株を掘起して取除き丁寧に耕転して十分に風化させ膨軟な土壤にしておき又降雨に際して浸水したり、多湿の土地は排水の対策を講じておくことも大切です。植付予定日の2週間位前までに60糎間隔に鍬巾で深さ15~20糎の溝を掘りよく腐熟した推肥や金肥の元肥を入れて土とよく混和して土を埋め戻し種いもが直接に肥料に触れないようにする。埋め戻しの程度は溝が地面よりやや低目しておくとして植付作業に便利である。元肥の量は1a当り推肥250匁、硫酸4匁、過石7.5匁、塩加3.5匁が標準であり更に追肥としては2回に分けて硫酸6匁を施します。

種いもとして輸入されてきたものはその生産地において植物防疫法による一定の厳格な規格に合格したもののだけが国の検査合格票がついて出荷されるので病害に対して一先づ安全ですが種いもの輸送並びに貯蔵中に病菌の汚染を受けたものが混入することも考えられます。馬鈴薯には多くの伝染病があり保菌いもがあれば栽培中に被害を受けるだけでなく病菌が土中に残り、その後の作付にも影響するので種いもの植付前に消毒が必要である。消毒はウスプルンやミクロジンの700~800倍液をつくり種いもが全部液中に浸たる程度に入れて25分間位浸漬したのち取り出して陰干する。同一液で3回までは使用できるがそれ以後は殺菌

力が減るので薬の追加又は浸漬時間を延ばさなければならぬ。消毒は作業中種いもの芽を損傷することが多いので、なるべく芽が伸びない内に行う。その最初に出た芽が特に生産力が旺盛であるのでその損傷は収量に影響することが大きい。又消毒液を入れる容器は金属製をさけ木製又はコンクリート製などを用いる。

種いもはその1個の大きさによって生産力が異なるが経済的見地等勘案して大体35~40瓦が適当であろう。種いもの大小は箱毎に大玉、中玉、小玉、と標示されている場合があるが大玉は115~200瓦で中玉は75~115瓦、小玉は40~75瓦の規格である。小さい方は丸のまま、植付け60g以上はその大きさによって大体1切片が38瓦位になるように2つ以上に切らなければならない。2つ切りにする程度のいもが最も作業し易い。2分するいもはたて切りにすると株立がよく揃う。3分するときは下の3分の1のところを横に切り後に残りをたてに切る。4分するときは、たてよこに切るのが普通であるが各切片に優勢な頂芽を配分するために頂部の真中に包丁を入れ縦に4分すると萌芽の揃いがよい。何れの場合も各切片に程よく芽が配置されるように切らねばならない。傷口のよく治らない内に植付けると病菌に犯されて腐ることがあるので切断後2、3日隔いて植付るのが安全である。

植付に際しては種いもは植溝上に30糎の間隔で切口を下にして伏せ込んで5~6糎程度の覆土をする。植付当時の土壤の乾燥は萌芽に多くの日数を要し且つ不揃いになりがちなので適度の湿り気のあるのが望ましい。又日の照る日中よりも朝晩か曇天の日に植付けるのがよい。種いもの各切片には芽の出方に早晚があるので未発芽や著しくおくれしているものは他のものと混植せずに圃場の一方にまとめて伏込むとその後の管理に便利である。

(島袋正雄)